2023 年 12 月 17 日（日）「赤い馬の騎士 ～争いを避けるキリスト者～」

ヨハネの黙示録 6:3-4

3 小羊が第二の封印を解いたとき、私は、第二の生き物が「行け」と言うのを聞いた。 4 すると、火のように赤い馬が現れた。それに乗っている者には、人々が互いに殺し合うようになるために、地上から平和を奪い取る力が与えられた。また、この者には大きな剣が与えられた。

【序論】

今日は地上で止むことのない戦争の問題を扱わなくてはなりません。キリスト者として生きるとき、必ず「神はなぜ戦争をお許しになるのか」という問いに直面します。この問いが投げかけられるとき、私たちはどう答えてよいか分からず口をつぐんでしまった経験があるのではないでしょうか。聖書の神様は「愛の神」だと言われている、それならどうしてこの世から争いがなくならないのか。私自身も様々な場面で聞かれてきたことであり、答えを出すことの難しさを感じてきました。これは、この世界にはなぜ「苦しみ」があるのかという、より大きな問題の一部と言えるでしょう。

【本論】

本論１．戦争を引き起こす赤い馬の騎士

今日の箇所には、「**赤い馬**」に乗る騎士に戦争を興す権限が与えられたという驚くべき記述があります。この命令の発信元は「神の御座」であり、神に側近で仕える四つの生き物の一つ、「**第二の生き物**」が指令を出しています。だからといって、この「赤い馬」と「騎士」が神に属する存在であるかどうかは別の問題であり、悪魔に属する者が何らかの目的によって用いられているのかもしれません。

> **小羊が第二の封印を解いたとき、私は、第二の生き物が「行け」と言うのを聞いた。すると、火のように赤い馬が現れた。**（6:3-4a）

「**赤**」という色が表すのは流血を伴う戦争であり、キリスト者に対する迫害というよりは、内乱とか革命を表しているでしょう。先の「白い馬の騎士」（6:1-2）が外側から来る支配者だったのに対し、ここでは内部的な混乱のことが言われているようです。汚職が蔓延り、増税によって国民の生活が圧迫されていくとき、不満が爆発してクーデターが起きるケースもあります。あるいは、移民を無制限に受け入れることによる治安の悪化が原因で内紛が勃発することもある。また、民族間の争いに見えるものが、実は外部の介入によることも多く、一民族を分断させることで武器の売買による巨利を得続けている人々が暗躍しています。アメリカの政権に入り込んでいるネオコン（Neoconservatism）は、世界中で戦争を興して武器を売りつけるという常套手段で金儲けを続けている。薬産業、人身売買、武器商人を軸

としたいわゆる国際マフィアです[i]。今年に入って、日本に対しては40年前の旧型ミサイルが１機20億円という値段で売り付けられ、日本政府も某国との戦争を可能な体制にすべく緊急事態条項の成立に向けて着々と外堀を埋めてきています。

このように、庶民は戦争を望まなくとも、上層部の決定によって戦争は引き起こされていくのが世の常です。そして、それによって巨額のカネが誰かの懐に流れ込むのであれば、その人々が戦争をやめることはないでしょう。「赤い馬の騎士」を、このような現代における「戦争屋」と安易にイコールとすることはできませんが、共通点を見出すことはできます。この流れは一層輪をかけて世の終わりの大戦争へと向かっていくことでしょう。

本論２．神はなぜ戦争を許しておられるのか

> **それに乗っている者には、人々が互いに殺し合うようになるために、地上から平和を奪い取る力が与えられた。また、この者には大きな剣が与えられた。**（6:4b）

さて、この最後の部分に注目しましょう。「**与えられた**」とあるように、世界に争いをもたらす人々は神の許しの下で活動しているということが分かります。では、神はなぜそのようなことを止め給わないのか。これが「神は愛なり」というメッセージとの間で聖書読者を悩ませている問題であります。

このことを理解すべく、ロイドジョンズの『神はなぜ戦争をお許しになるのか』という本を読み直しておりました。この本の４章（p. 89-113）の内容をご紹介しますと、まず基本的に「**聖書のどこを見ても決して戦争がなくなるなどとは――少なくとも千年期が来る前になくなるとは――約束されていない**」ということを著者は指摘しています。「**聖書の教えは、それとは全く逆のように見受けられる**」「**時代の終わりがやって来るまでは、また、特に最終的な完成がいやまして近づくにつれて、そこには『戦争や戦争のうわさ』があるはず**」だと。主イエスご自身がこのように言っておられます。

> **戦争のことや戦争の噂を聞くだろうが、慌てないように注意しなさい。それは必ず起こるが、まだ世の終わりではない。民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、方々に飢饉や地震が起こる。**（マタイ 24:6,7）

著者は、戦争の根本原因は人間の欲望にあると指摘します。

> **あなたがたの中の戦いや争いは、どこから起こるのですか。あなたがたの体の中でうごめく欲望から起こるのではありませんか。**（ヤコブ 4:1）

戦争は私たちの目に顕著な悲劇として映りますが、著者はそれを「**罪の数ある現れの一つ、罪の結果の一つ**」と捉えています。「**戦争を起こさないでくださいとか、戦争を防いでくださいと神に願うのは、罪の結果のうち、ある特定の結果が起こらないように神に願うこと**」。「**もし神の聖さや、罪そのものに関心があるとしたら、神に向かって、どのような罪も起こらないようにと、また、どのような不義も抑制してくださるようにと願うはず**」だと。著者が言いたいのは、戦争は人間の罪の極まった姿としての現れであり、その本質を私たちが持っているという事実を認めなくてはならないということです。「**確かに聖書は人命を神聖**

なものと見なし、欲心や復讐心を満足させるだけのために人命を奪うことを禁じてはいるものの、それと同時に聖書が教えるところ、神の側からすると、魂こそ肉体のいのちよりも無限に大きく重要なものである。」「神の関心は、私たちのいのちがこの地上で、ある程度の年数だけ余計に保たれたり、引き延ばされたりすることにではなく、むしろ私たちが神との正しい関係に入り、ご自分の聖なる御名に栄光を帰すような生き方を送るようになることにある。」

神が戦争を許容しておられる理由として、三つのことが挙げられています。第一に、人類全体が負っている罪の結果の一部を私たちも引き受けているということ（誰一人として罪の結果と無関係に生きていくことはできない）。第二に、戦争という悲劇を通して私たちが罪の正体を見抜けるようになるということ（人間とは何者であって、何をしでかしかねない性質を持っているかが、究極の状況によって明らかになる）。第三に、私たちを神に立ち返らせるため（悲惨な状況下にあってこそ、平時には分からない神の恵みに気づく）。

本論３．それではどう生きるべきか

ロイドジョンズの見解を参考に、今日の箇所を読み解く努力をしてまいりました。世界中で巻き起こされている紛争は、人間の根本的な罪の性質（欲望）の現れであり、その極まった姿と言えます。しかし、それでも戦争とは罪の結果の一側面に過ぎません。では、罪から贖われた者たちは、そのような世界の荒波に揉まれながら、どのように生きていけばよいのか、最後にそのことを考えたいと思います。それはもちろん、罪人だから戦争に加担するのは致し方ないことだという判断ではありません。悪の力があまりに大きいから逃れることはできないと諦めてしまう道でもない。戦火をくぐり抜け、イエス・キリストの平和を実現する細い道を探し続けるのが私たちにできることではないでしょうか。神の視点に立って世界を俯瞰し、悪しき者の策謀を見抜き、それに巻き込まれず、人を殺める道をどこまでも避け続ける。世の終わりが近づけば近くほど、主イエスが予告しておられる通り、闇が深まっていくことは間違いないでしょう。そのようなことは起こるべくして起こるということを忘れず、動揺することなく、その悪の力も主イエスの来臨によって打ち砕かれるという約束に立ち、最終的な神の国の完成を信じて歩み続けたい。

より身近な生き方としては、私たちの日常生活の中で常に主を目の前に置き、隣人を愛し、自分にとって「敵」という存在はもはやこの人生にはいないということをあらゆる局面で実現していきたいと思います。戦争が人の欲望と憎しみから出るものであるならば、その歯車に乗らないという選択肢があるのです。私たちは過去の「争い」とは縁を切ったのであり、アダムによって呪われた地に福音の種を蒔く者とされました。壊れたものを丁寧に修復していく喜びに生きるようになったのです。神との正しい関係に生きることに集中し、質の高い人生を構築していきたい。この世の生涯の日々が一日でも長く与えられるならそれは感謝なことですが、私たちの目的は永遠に神と共にあることなのです。

【結論】

今日は「赤い馬の騎士」の登場という記事から、現代に起きている戦争と、自分の内に潜む同質の罪の問題について考えました。主イエスが語っておられる終末的な見地に立って、自分の人生の道を選択していきたい。御言葉に耳を傾ける一人びとりに主の守りと助けがありますように。

【祈り】

平和の主イエス・キリストの父なる神様。人類史は争いによって形成されてきたと言っても過言ではありません。戦争を望んでやまない人々がおり、それに巻き込まれて苦しむ人々もいます。キリスト者はどう歩むべきかが常に問われ、私たちも来るべき時代に心を備えなくてはなりません。どんなときにもイエス・キリストの平和を実現する者であることができるように、力を与えてください。そして、悪しき者の謀を完全に打ち破り、永遠の神の国を完成へと導いてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
人の目に映る善も悪も、人知を超えてご自身の目的のために用い給う、父なる神の愛、
十字架により憎しみの連鎖を断ち切り、和解の道を示し給うた、主イエス・キリストの恵み、
主イエスに従う者に、平和の種を全世界に蒔かせ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。

---

[i] バイデン政権の国務省のスリートップ（ブリンケン国務長官、シャーマン国務副次官、ビクトリア･ヌーランド国務次官）はみなネオコンである。大学の系列で言うと、ジョンズ・ホプキンス大学、イエール大学はネオコン系で、テクノクラートと呼ばれる政権トップに立っている人々の出身校を見ると、彼らの思想が分かってくる。ブッシュ家、ディサンテス、ヒラリー・クリントン、秘密結社スカル＆ボーンズ…等も然り。ネオコンの上には（現在は鳴りを潜めているが）ラッセル商会があり、ラッセル商会の上にはキャボット家がある。キャボット家とは、英国王ジェームズ一世によってアメリカに派遣された入植一族であり、彼らはジェームズ一世が 1606 年に北アメリカ海岸に植民地を建設するために創設した「ヴァージニア会社」の業務を行なっていた。ゆえに、ラッセル商会の基本的な事業が奴隷貿易と奴隷監視であったことは十分に頷けるだろう。ラッセル商会は、トルコのアヘンを日本経由で中国（清）に売ることで所謂「薬産業」も担っていたが、この時期のアヘン農場の経営者はブッシュ家であった。この系列は現在世界で最も力を持ちつつあり、金融界を牛耳ってきたロスチャイルド家さえも武力によって吸収しようとしている。